

(題名) 二千元札を巡る課題と処方箋

(大学・学部名)	(氏名)
法政大学 経営学部	矢口堯之
法政大学 経営学部	大高将義
法政大学 経営学部	清水健

(題名) 二千円札を巡る課題と処方箋

(応募論文の要約<400字以内>)

二千円札発行から8年が経過し、近年その流通量は減少の一途を辿る。二千円札は、数理的には利便性が高いとされる。それにもかかわらず、なぜ普及しないのか。

国際比較によると、他先進国では二千円札相当の紙幣が普及していることは確かである。だが、どの国でも、数理的な利便性から利用していると言うよりも、数種類の紙幣を集中的に利用し、(結果的に)二千円札相当の紙幣をその1種類とする傾向がみられた。また、ATM及び自動販売機の二千円札への対応を調査したところ、対応は部分的であり普及を後押しする効果は低いことが明らかとなった。

そこで、例外的な流通量の伸びを示す沖縄県の事例を分析したが、沖縄故の特殊事情が存在するに過ぎず、全国区での普及の難しさを改めて裏付けることになった。

上記の理由から、現実的な案としては、紙幣発行の社会的コストを踏まえて、今後は二千円札を記念通貨として扱い、新規発行停止を検討すべきとの結論に至った。

(応募論文の本文<8枚以内>)

はじめにⁱ

2000年7月19日、二千円札が発行された。はじめに発行の経緯を整理しておきたい。そもそもは、大蔵省印刷局(現 国立印刷局)を退職した1人が「2000年を記念して二千円札を出せないか」と発案したのがきっかけだという。紙幣を巡る印刷局の大掛かりな仕事は、1984年のD券発行が最後だったということもあり、「技術水準を向上させるためにも、新しいことに挑戦したい」という製作サイドの思惑があったようである。この話を聞きつけた当時の小渕恵三首相が二千円札発行をミレニアムプロジェクトの目玉と位置づけ、沖縄サミットをもにらみ、発行が決定されたとのことであるⁱⁱ。

このように、二千円札は極めて政治的な要因から発行が決まったが、それでも一定の経済効果も期待された。例えば、特に米国では20ドル札の流通量が最も高く、数理的な面からも利便性は高くなるという効果である。そして、より直接的な効果は、自動販売機やATMといった機械類を取り扱う業種で期待された。すなわち、むろんコスト増要因にはなるものの、飲料メーカーや金融機関における自動販売機やATMの入れ替え需要が見込まれることから、機械業界などへの波及需要が見込まれていた。発行当初、和光経済研究所の大下敬勇氏は、全国の自動販売機やATMなどの改良や新規製造が行われ、関連業種の収益が向上するなどから、総額で約1兆9,000億円の経済効果があるとの試算を示したⁱⁱⁱ。具体的には、自動販売機やATM、現金自動支払い機(CD)の改良費や製造費の総額は5,200億円に上り、これに伴う関連企業の受注増加額や輸送費、従業員の昇給額などを合計すると、経済効果の総額は1兆8,996億円に膨らむとしている。この結果、国内総生産(GDP)を0.18%(1998年度時点)押し上げることになり、同研究所では、「現在のような低成長期に経済成長率を0.2%近く押し上げるインパクトは大きい」とし、二千円札の発行が景気回復に向けて、ある程度の景気の押し上げ効果に繋がると分析していた。

しかし、2003年8月末には五千円札の流通量を一時的には抜いたにも関わらず、それ以降は年々流通量が減少の一途を辿っている。

そこで本稿では、二千円札の利便性を明らかにしつつ、減少の一途を辿る原因を様々な角度から分析し、二千円札の今後に向けた提案を行いたい。

1章 二千円札の現状と利便性

この章では、二千円札の発行開始から現在までの流通量の推移に触れつつ、二千円札の流通に関する経緯を概観する。そして、二千円札の利便性について考えていきたい。

1-1 二千元札の発行から現在に至るまで

二千元札はどの程度流通しているのだろうか。日本銀行の統計によれば、流通量は1億4,000万枚(2008年8月末)であり、金額にするとおよそ2,800億円となる。この1億4,000万枚というのは全流通量のうちわずか1.3%であり、現在わが国で発行されている現役紙幣のなかで最も少ない紙幣である。2番目に少ない五千元札は5億2,000万枚(構成比：4.7%)となっている。

図表1では、二千元札発行当初から現在に至るまでの流通量の時系列的な推移について五千元札を比較対象としながら示している。発行当初から約半年経った2000年12月、二千元札の流通が伸びず、日本銀行は今後の発行予定枚数を10億枚から7億7,000万枚に削減することを決定した。一方で、12月4日から1年間、本店において個人向けに二千元札への両替業務を行い、まもなく流通量は1億枚を超えることとなった。その後、ATMなどの機械対応が進んだこともあって、流通量は堅調な伸びを見せた。そして2002年12月、日本銀行の二千元札両替業務が1年延長の末、2年間で終了した。その間、のべ4万人が249万枚、49億8,000万円分の二千元札の両替を行ったとのことである。翌年の8月、二千元札の流通量は4億4,515万枚に達し、五千元札の4億4,384万枚を上回った。その後、2004年8月には5億枚を突破した。

ところで同年11月になると、千円、五千元、一万円の3種の新日本銀行券が発行されたが、一部市中銀行ではその人気の高さ故に新紙幣の両替枚数を制限したほどであった。新札への切り替えは、偽造対策を施した紙幣の導入に伴う偽札の駆逐にあったことから、新札と同じく高度な偽造防止技術が盛り込まれていた二千元札を活用し、市中銀行は新札不足に対応することができた。

ただ、その後は二千元札の流通量は減少の一途を辿り、2006年5月には2002年2月以来4年3ヶ月ぶりに流通枚数が2億枚を割り、以後は現在に至るまで減少トレンドが継続している。

なお、図表1(および3)は二千元札が国民によって日常的に利用されていないことを示唆している。通常、日本人は年末に年越しの現金需要を高める特性がある。他通貨では12月に極端に需要が伸びているのに比べ、二千元札はそのような季節性が観察されないためである。

1-2 利便性

流通量が減少する二千元札ではあるが、そもそも新規発行する経済的な意味や利便性はどこにあったのだろうか。むろん、前述の通り、ATMや自動販売機の新札対応需要が期待されたことは事実であるが、これは企業側からしてみれば

ば、コスト増の要因になるばかりで、あまり歓迎されない話であろう。むしろ、ユーザー(特に消費者)にとって、どのような利便性があったのであろうか。

数理的な意味での利便性について、北村(1999)によると、以下の通り説明される。まず最適な貨幣の発行単位とは、貨幣の使用価値が相対的に等しくなり、相対的な需要が無差別になるように定められている貨幣単位を指す。最適な貨幣の発行単位は 3^k で表すことができる。その発行単位においては、想定されるあらゆる支払いに対して貨幣の受渡しが最小量で行える。 3^k は 1、3、9、27、81、243、729、2187、6561 である一方、わが国の貨幣の発行単位は、1、5、10、50、100、500、1000、2000、5000、10000 である。これを見ると 2,000 円という発行単位は理論値の 2187 に近いことがわかる。

では、二千元札が十分に流通した場合、どのようなことが具体的に期待できるだろうか。たとえば、9,000 円を紙幣で支払う場合、二千元札の有無によって支払い方法が大きく異なることを示しているのが図表 2 である。千円札と五千元札のみの場合の支払い方法は 2 通りなのに対し、二千元札を組み合わせることによって 8 通りへと増えることになる。そして注目すべき点は支払う紙幣の枚数である。千円札と五千元札で支払うときは最低でも 5 枚の紙幣が必要である。それに対して二千元札を加えた支払い方法では最も少ない枚数の場合、3 枚で済む。

わが国の通貨の種類別流通量を見ると、上記の発行単位の理論値から乖離している 50 円、500 円、5,000 円の流通量は非常に少なく、数理的なロジックと整合的となっている(図表 3)。ただ、二千元札については流通量が極めて少なく、逆に数理的なロジックと不整合となっている。

1-3 国際比較から見た利便性

わが国では、利用通貨の実際が、数理的なロジックとは必ずしも整合的ではない。では、このような現象はわが国固有のものなのだろうか。それとも、世界で共通して観察される事象なのだろうか。

実は、諸外国と比較すると通貨別の流通量にはいくつかの興味深い特徴があることがうかがわれる(図表 4)。第 1 に、日米欧ともに五百円以上の通貨^{iv}のうちシェア上位 3 通貨で 70%以上のシェアを握っており、特にわが国の場合は 96%のシェアとなっている。第 2 に、通貨単位が長年にわたってリセットされていない日米では上記シェア上位 2 通貨で 65%以上のシェアを占めており、2 種類の通貨でかなりの通貨取引の用を達してしまっていることがわかる。第 3 に、通貨のリセットが比較的近年行われた欧州では、かなりバラエティに富んだ通貨種類が存在し、日米に比べるとバランスよく各種類が用いられているこ

とがうかがわれる。第4に、一万円程度よりも高い単位の通貨は欧米では発行されているものの、殆ど利用されていない。

以上から、世界的に見ても通貨種類をあまり多数導入しても全てが使われる可能性は低く、一万円程度以内の価値の限られた種類の紙幣を集中的に使うことが利便性に適うようである。つまり、数理的な理論では利用枚数の最小化を目的関数としているが、実際には利用紙幣の種類数の最小化を行う傾向があるということだろう。ユーロは導入後、10年程度しか経っていないにも関わらず、既に3種の通貨のウエイトが大きくなっている。国民性の違いもあるだろうが、少なくとも先進国では一般的に、利用される通貨の種類にいわば「デファクトスタンダード」が形成されるというように見受けられる。

また、確かに欧米では20ドルや20ユーロの利用頻度は高いという傾向が見られる。その意味では理論と整合的といえるが、ユーロ地域の主要国であるドイツやフランスでは従来から20マルク札、20フラン札が流通していた。米国でも1928年来、20ドル紙幣が存在しており、20という単位に慣れているという側面があることは否定できない。

わが国では、C券の導入された1960年前後より既に五百円(札)、千円、一万円という種類が確立されており、5の倍数で種類分けをするという方式が戦後続いている。このようななかで、「後発組」である二千円札は分が悪いという面があるのは否めない事実であろう。

2章 ATM・自動販売機の対応状況からみた二千円札

現代的な通貨の利用においては、通貨の「機械による読み込みやすさ」が非常に重要である。よく知られたとおり、硬貨に比べて紙幣は機械が読み込みやすい。これは、硬貨が変形した場合、機械への投入すら難しくなるのに対し、紙幣の場合は多少の損傷があっても投入が可能であり、機械も読み取ることができるためである。ということは、二千円札にも「機械による読み込みやすさ」を武器とした流通拡大の可能性があるはずである。そこで、本章ではATM、自動販売機を例に取り、わが国経済への二千円札の浸透余地について考えていきたい。

2-1 銀行ATM

我々は、全国の主要銀行51行にヒアリング調査を実施し、ATMの二千円札への対応状況を調べた^v。具体的には、①全稼働ATMのうち何台が二千円札対応機か、②対応している場合は対応させた理由、対応していない場合は対応していない理由、について調査した。

調査結果によると、51 行の全 ATM が二千円札の「入金」には対応する一方、「出金」については琉球銀行の 1 行のみが対応をしている。つまり、沖縄県以外では一般の消費者が二千円札を手に入れても、その二千円札が ATM に 1 度入ってしまうと、銀行から何らかの形で二千円札での支払いが行われないう限り、市中銀行の金庫の中に入ってしまう、最終的には日本銀行に戻ってってしまうことになると思われる。

二千円札の出金に対応しない理由には、テクニカルな要因、費用面の要因、そして銀行としてのインセンティブの要因があるようである。まず、テクニカルな要因としては、ATM 内にて入出金用に紙幣を用意しておく箱であるカセットボックスの制約があり、二千円札を入れてしまうと一万円札と千円札の準備枚数が少なくなってしまう、一万円札と千円札の紙幣切れを起こした場合、顧客に迷惑がかかってしまうという面がある。また、費用面・インセンティブ面の問題として ATM 改修のコストが、必要性や顧客ニーズに鑑みて高すぎるとの指摘もなされた。また、二千円札が必要ならば両替機を使えば済む話であるため、ATM 改修の必要は感じられないとの意見も聞かれた。なお、約 100 店舗を擁する地方銀行の担当者の方からは「全 ATM を改修し二千円札を出金可能にするには、2 億円以上の費用がかかる」とのことであった。中小・地域系金融機関では、不良債権問題に目処の付いている銀行と、まだ不良債権が少なからず残る銀行がある。また、不良債権額に関係なく、ゆうちょ銀行や地方への進出を進める大手行との競争の中で、大手行以上に二千円札への対応にコストを投じる余裕がなかなかないことは容易に想像できる。

すなわち、ATM の対応が普及しないために、二千円札の流通が進まないのではなく、二千円札が流通していないため ATM を対応させないというのが、銀行の論理である。だが、五千円札も同様に「出金」に対応していないことを踏まえると、「鶏が先か、卵が先か」のような議論になってしまうものの、ATM が未対応だから二千円札が流通していない、という面は多かれ少なかれあるように思われる。

2-2 コンビニ ATM

大手コンビニ 5 社の ATM 設置台数は 2.7 万台である^{vi}。うち一部コンビニ ATM では、二千円札出金に対応している。なかでも、イーネット設置の ATM 2,300 台、ローソンの子会社における ATM 5,500 台では二千円札を積極的に使用している^{vii}。

その理由は、先述の数理的な意味での二千円札の有用性に通じるものである。コンビニ ATM では小型化に伴い、紙幣の収納スペースの節約のため二千円札

の有用性が高い。コンビニ ATM では、出金額が小額であり千円札の利用頻度が高い。銀行 ATM での最大引き出し額は 100 万円以上がほとんどであるが、コンビニ ATM では最大でも 20～30 万円であり、このような大金は滅多に引き出されることはない。そのため、千円札を二千円札に置き換えることでスペースを半分にでき、千円札切れの防止となり、ATM 管理費の削減に繋がる。

しかし、二千円札対応 ATM は、多めに見積もっても全国銀行(ゆうちょ銀行含む)及び大手コンビニ 5 社で稼働する ATM16.5 万台のうちわずか 4.7%程に過ぎない^{viii}。これに加え、他コンビニ及び流通企業系 ATM などと考慮すると普及率は更に低いことになる。

2-3 自動販売機

わが国の自動販売機普及台数は世界 2 位、さらに 1 人当たりの台数、販売金額においては世界 1 位、国内総生産(GDP)比 1.3%に達する^{ix}。このように、わが国において自動販売機の果たす役割は非常に大きく、自動販売機での二千円札の利用可能性は、その流通に大きな影響を与える。

そこで、日本自動販売機工業会にヒアリング調査を実施し、銀行のケースと同様の質問を行った^x。それによると、日本全国にある自動販売機台数は 541 万台であり、そのうち乗車券自動販売機のほぼ全数(全 2.1 万台)と食券自動販売機の半数程度(全 2.3 万台)で入金に対応している。しかし、飲料自動販売機をはじめそれ以外の機種は一部の例外を除き対応しておらず、二千円札対応自動販売機は全自動販売機数の 0.6%程度にとどまっていることがわかった。

対応機が増えない理由として同協会は、自動販売機の改修コストがかかる上に二千円札の流通量は少なく、二千円札を対応させたとしても売上げの向上は望めないとのことを指摘している。また、今後の普及に関しては二千円札の流通次第ではあるが、なかなか難しいとの見解であった。

以上のように、全国銀行 ATM とコンビニ ATM 及び自動販売機の対応状況からわかる通り、二千円札が流通するための環境は想像以上に整っていない。

3 章 沖縄県の取り組み

このようななかで、実は沖縄県では二千円札の流通量が例外的に堅調な伸びを見せている(図表 5)。ここでは、沖縄県で流通量が伸びた背景を探る。

前章で触れた通り、今回ヒアリングした銀行のなかで唯一、二千円札の入出金に対応した ATM を保有していたのが琉球銀行である。図表 5 からわかるように沖縄県内での二千円札流通枚数が堅調な伸びを示しており、2008 年 6 月末時点では 301 万 8,000 枚で前年比 10%増加している。また、季節性を読み取

ることができ、一般への浸透が進んでいることが示唆される。

沖縄県では二千円札普及のために様々な取り組みが行われている。まず、沖縄県には「二千円札流通促進委員会」という民間のボランティア組織が存在する。日本銀行那覇支店によると、同委員会と那覇支店が中心となり、以下のような取り組みを促している。

- ①金融機関における二千円札供給面の体制整備(ATM、両替機、窓口での対応拡充等)
- ②小売・ホテル業界等における二千円札による「釣り銭」支払の拡充
- ③給与・賞与支払における二千円札利用拡大と個人による二千円札利用促進
- ④ホームページ等を通じた二千円札流通促進運動
- ⑤ホームページ等を通じた二千円札流通促進運動の情報発信
- ⑥名刺・封筒等の印刷物に二千円札流通促進に関する刷り込み実施
- ⑦諸会合の参加費用徴収にあたって、二千円札の利用の呼びかけ
- ⑧県外出張時、極力二千円札を持参・使用を通じて PR

②～⑧は利用を促すキャンペーンであり、二千円札に比較的思い入れのある沖縄県民が積極的に利用をしているものと思われる。なぜなら沖縄県民には沖縄サミットを記念して発行された二千円札を普及させたいというインセンティブが存在すると考えられるからである。守礼門が描かれていること、観光振興や特産品の PR に繋がること、「平和希求紙幣」と銘打つことで戦争時の悲惨な歴史を少しでも知ってもらいきっかけとしてもらうこと、などがその主な理由であろう(二千円札流通促進委員会(2000))。

しかし、どんなに利用をしようとしても、実際に二千円札が手元になければ仕方がない。給与は大半の場合、銀行振り込みで行われるなかで、供給面の整備、つまり ATM の整備がやはり重要なようである。ただ、琉球銀行では ATM 全 365 台中、二千円札出金可能な ATM は 4 支店 18 台のみであり、必ずしも ATM が決め手でもないようである^{xi}。実際、ヒアリングを進めてみると、必ずしも沖縄県ですら二千円札に対する積極的な需要はないようである。琉球銀行で使われている二千円札対応型 ATM には「二千円札優先ボタン」があり、二千円札を混ぜて引き出すかどうかを選択できる。新型 ATM を導入している支店でこの優先ボタンが実際にどれぐらい活用されているのかヒアリングをした。正確なデータは採っていないとのことだが、機械内の二千円札はほとんど減らないため、半年以上補充したことがないとのことであった。更に、窓口で二千円札を混ぜて支払いを行うことに対する了解を求めると、多くの顧客が拒否するそうである。

統計上は二千円札の流通高は上昇方向にあるものの、沖縄県ですら二千円札への潜在的な需要はあまり高くないようである。それにも関わらず、流通量が伸びているのは、②～⑧の利用を促すキャンペーンに呼応した銀行や小売店等の努力によるものであると考えられる。

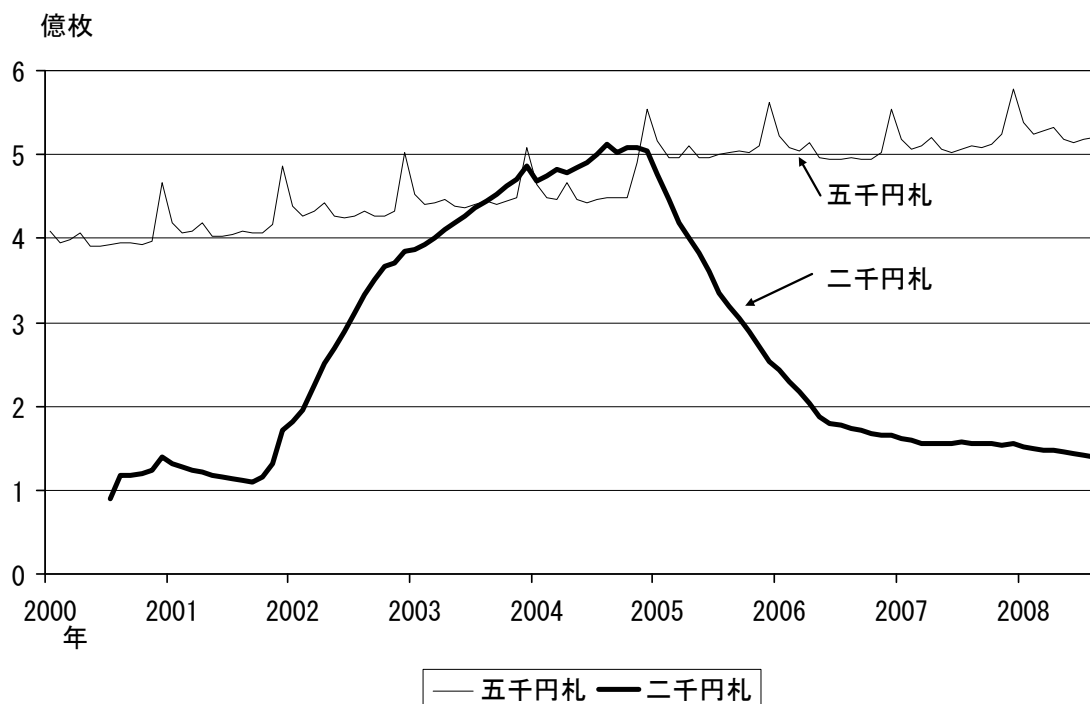
4章 むすびにかえて

1章で示したように、理論的には二千円札の普及、利用によって利用紙幣枚数の効率化が可能ではある。しかし、国際比較をしてみると、通貨の利用の効率性は結局のところ「慣れ」に拠るところが大きく、他種類の紙幣があっても、2～3種類を集中的に利用するという客観的事実があることがわかった。さらに、出金が可能なATMは一部の銀行、コンビニに限定され、二千円札を我々が確実に手にするには、両替機を使うぐらいしか策はない。

日常で手に入る機会がないため、二千円札が普及するには我々が積極的に行動するしかない。特に、小売・サービス業などが釣り銭として二千円札を使用することが重要である。しかし、流通していない二千円札を釣り銭に使用するには、両替を行う手間と両替手数料のコストが発生する。そこまでして、馴染みのない二千円札を使用するインセンティブがあるのだろうか。

以上を踏まえると、将来的な二千円札の扱いについては2つの方策が考えられる。まず、1つは二千円札の新規発行停止を検討することである。今後は二千円札を記念通貨的なものとして取り扱い、今後の追加発行等は見合わせるという方法である。もう1つは、大胆な改鑄またはデノミによって、人為的に紙幣を3種類(または2種類)に絞ってしまい、その中に二千円札を入れるという方法である。しかし、このような方法を採用してまで二千円札を普及させる経済的な意味は皆無であろう。通貨はあくまで利用者の利便性を考えるのが第一である。通貨の番人として、日本銀行が政治的な圧力に左右されることなく、二千円札の新規発行停止を提案していくことは、日本銀行の独立性をPRする上でも有意義であると思われる。日本銀行の英断を期待したい。

図表1 二千元札と五千元札の流通量



(出所) 日本銀行「通貨流通高」

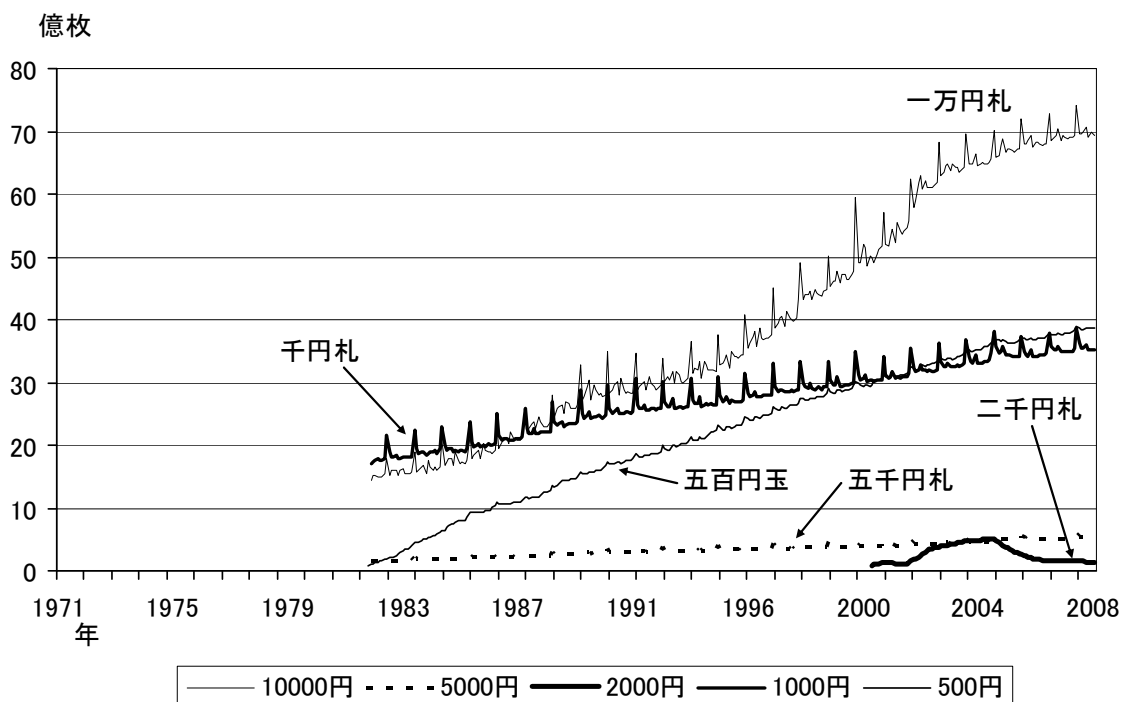
図表2 9,000円の支払、受取方法

紙幣の単位	内訳	紙幣の枚数
千円札	千×9	9
五千元札+千円札	五千×1、千×4	5
五千元札+二千元札 +千円札	五千×1、二千×1、千×2	4
	五千×1、二千×2	3
二千元札+千円札	二千×1、千×7	8
	二千×2、千×5	7
	二千×3、千×3	6
	二千×4、千×1	5

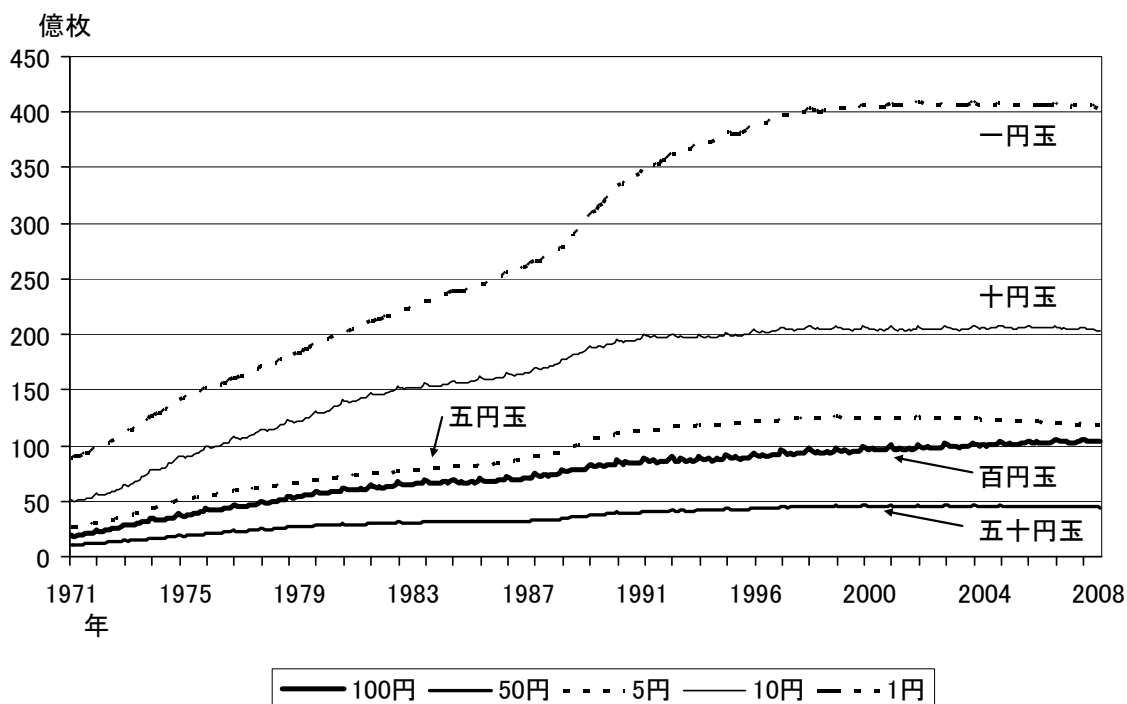
(出所) 筆者作成

図表 3：貨幣の流通量推移

高額通貨



小額通貨



(出所) 日本銀行「通貨流通高」

図表 4 日米欧の通貨別流通枚数

高額通貨

種類		¥10,000	¥5,000	¥2,000	¥1,000	¥500	
枚数(億)		69	5	1	35	39	
シェア(紙幣・貨幣計)		6.8%	0.5%	0.1%	3.5%	3.8%	
シェア(うち¥500円以上)		46%	3%	1%	24%	26%	
種類	€ 500	€ 200	€ 100	€ 50	€ 20	€ 10	€ 5
	¥77,500	¥31,000	¥15,500	¥7,750	¥3,100	¥1,550	¥775
枚数(億)	478	158	1239	4404	2431	1862	1376
シェア(紙幣・貨幣計)	1%	0%	1%	5%	3%	2%	1%
シェア(5ユーロ以上)	4%	1%	10%	37%	20%	16%	12%
種類	\$500～	\$100	\$50	\$20	\$10	\$5	
	¥52,500～	¥10,500	¥5,250	¥2,100	¥1,050	¥525	
枚数(億)	0.005	57	13	61	16	22	
シェア(紙幣・貨幣計)	-	-	-	-	-	-	
シェア(5ドル以上)	0%	32%	7%	34%	9%	12%	

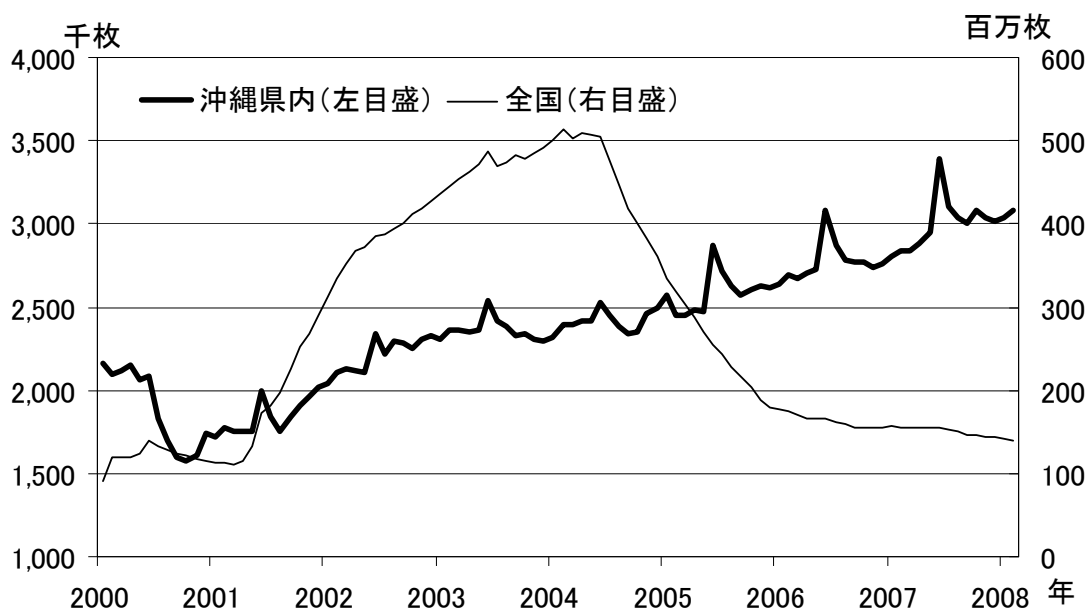
小額通貨

種類	¥100	¥50	¥10	¥5	¥1			
枚数(100万)	103	44	203	118	404			
シェア(紙幣・貨幣計)	10%	4%	20%	12%	40%			
種類	€ 2.00	€ 1.00	€ 0.50	€ 0.20	€ 0.10	€ 0.05	€ 0.02	€ 0.01
	¥310	¥155	¥78	¥31	¥16	¥8	¥3	¥2
枚数(100万)	3932	5925	4761	8237	10395	13035	15199	18690
シェア(紙幣・貨幣計)	4%	6%	5%	9%	11%	14%	16%	20%
種類	\$2	\$1						
	¥210	¥105						
枚数(億)	8	93						
シェア(紙幣・貨幣計)	-	-						

(注) 日欧は 08 年 8 月末時点、米は 07 年末時点。米国は紙幣のみ。ユーロとドルの円換算は、155 円/ユーロ、105 円/ユーロとして計算。各国通貨は価値の近い通貨同士を隣接させる形で表記。日本の 500 円札は除く。シャドーは、500 円、5 ユーロ、5 ドル以上の通貨のうち、シェア上位 3 種を指す。

(出所) 日本銀行「通貨流通高」、ECB, “Banknotes and Coins Circulation”、FRB, “Currency in Circulation”

図表 5：沖縄県内と全国の二千円札の流通量推移



(出所) 日本銀行那覇支店「全国と沖縄県内の二千円札の発行高推移」

参考文献

- 北村行伸(1999)『貨幣の最適な発行単位の選択について』
黒田東彦(2005)『通貨の興亡 - 円、ドル、ユーロ、人民元の行方』 中央公論
新社
二千円札流通促進委員会(2000)「二千円札流通促進委員会の復活・常設化につ
いて」
鷺巣力(2003)『自動販売機の文化史』集英社新書

参考 Web

- 貨幣博物館(<http://www.imes.boj.or.jp/cm/htmls/index.htm>)
国立印刷局(<http://www.npb.go.jp/>)
全国銀行協会(<http://www.zenginkyo.or.jp>)
日本銀行(<http://www.boj.or.jp/>)
日本銀行那覇支店(<http://www3.boj.or.jp/naha/>)
日本自動販売機工業会(<http://www.jvma.or.jp/>)

-
- i 本稿を作成にするにあたって、丁寧なご指導をしてくださった平田英明准教授(法政大学経営学部)ならびにご多忙のなかヒアリングにご協力してくださった各銀行、行員の方々及び、日本自動販売機工業会の方に記して深く感謝したい。
- ii 日本経済新聞記事「2000円札発行の舞台裏」(1999年10月8日)による。
- iii 日本経済新聞記事「2000円札」の経済効果は?」(1999年10月10日)による。
- iv 五百円の場合は5ユーロまたは5ドルが対応する紙幣だと考える。以下、同様の比率で価値が対応通貨になるものとして記述する。
- v ここでの主要行とは、ゆうちょ、三菱東京UFJ、みずほ、三井住友、北海道、青森、岩手、秋田、七十七、山形、東邦、足利、常陽、群馬、千葉、埼玉りそな、東京都民、横浜、北陸、第四、北國、福井、山梨中央、八十二、大垣共立、静岡、愛知、三重、滋賀、京都、近畿大阪、但馬、南都、紀陽、鳥取、山陰合同、中国、広島、山口、阿波、百十四、伊予、四国、福岡、佐賀、十八、肥後、大分、宮崎、鹿児島、琉球の各行。なお、第四銀行のみ一部ATMで入金未対応だが、2009年度末までに対応予定。ヒアリングは2008年9月中旬に実施。
- vi セブンイレブン(2007年9月末)、ローソン(2007年7月10日)、ファミリーマート(2007年7月31日)、サークルKサンクス(2008年2月18日)、ミニストップ(2008年3月21日)の集計値。計数は各コンビニ Web ページによる。
- vii イーネットはファミリーマート、ミニストップ、サークルKサンクスなどでATM事業を展開する企業(計数は二千円札対応ATMのみ 2008年8月末)。
- viii 二千円札対応ATMは、イーネットATMとローソンATM計7,800台。ただし、ローソンATMについては一部のみ二千円札に対応(台数は非公表)のため、これよりも実際には少ない台数しか稼動していない。なお、全国銀行の計数は全国銀行協会「CDオンライン提携取引状況」、及びゆうちょ銀行『ゆうちょ銀行 ディスクロージャー誌 2008』による。
- ix GDP比は日本の自動販売機の1年間の売上げ約7兆円(日本自動販売機工業会「自販機普及台数及び年間自販金額」による)、国内総生産515兆円(内閣府による)として算出。順位については、鷺巣(2003)による。
- x 2008年9月末実施。
- xi 設置支店は、壺屋支店・城間支店(ケスクマ)・那覇新都心支店・南風原支店(ハエバル)。なお、今後は二千円札対応型ATMを随時導入していく方向とのこと。